

巻 頭 言

かかりつけ医が小児科専門医であること

副会長 深田 昭彦

日本に少子化が進み、一人っ子、二人っ子が当たり前の時代になった。小児科医は冷や飯を食う時代になるのかと思っていたら意外ともてはやされているように思われる。少ない子どもを大事に育てようという気運が高まっており、今まで医師に診せなかった病気でも、あわてて受診するようになったためと思われる。政府も多少は考えていてくれるようだが、そんなフォローの風がいつまで続くことやら・・・

小児科専門医というのは他の専門医と少し違っている。一般に専門医というのはアレルギー専門医とか消化器専門医などのように疾患別になっているものが多い。では、小児科専門医は何が専門なのだろうか？子どものことなら何でも知っているということだろうか？では、喘息の子どもにとって、小児科専門医でアレルギー専門医が最もよいのは当然であるが、小児科専門医に受診するのと、内科ではあるがアレルギーの専門医に受診するのとどちらがよいのだろうか。我々は、もちろん小児科専門医だよ！と答えると思うが、世間一般にはそうは見られていない。我々にとってかなり分が悪いように思える。各疾患についてそういうことになる我々が診る病気は限られてきてしまう。

それでは我々は他科の医師には出来ないどんな特技があるのか？乳幼児健診、これはおそらく小児科の医師でないと難しいのではないだろうか。予防接種、これに関しては接種時期、接種間隔、接種量などを少し勉強すれば、特殊な場合を除いては誰が接種してもそう変

わらないように思える。

私の近くの保育園では、風邪は小児科ではなく耳鼻科へ行きなさいよと公言してはばからない所もある。まさか全ての保育園がそうだとは思わないが、私にとってショックな出来事だった。

子ども達にとって小児科専門医がかかりつけ医であるとしたらどんな利点があるのだろうか？余分な薬を使わない、特に抗生剤の使用量が少ないなど細かな点はあるのだろうが、何かもっと絶対的なものが欲しい。

原点に帰ってみると、小児科医の目標は「心身共に健康な成人を育てる」ことにある。以前、子育てについて講演を頼まれたことがある。市政便りに載せたら希望者が殺到し定員の4倍を越し、入場は抽選になってしまった。別のタイトルの時、会場はがらがらだったことを思えば、如何に多くのお母さん達の子育てに関心を持ち、悩んでいるかが伺える。

我々は、受診してくれた個々の子どもや親を理解し、その子育てに関しサポートすべきである。そして、それを押し進めていくときに避けて通れないのが6%を越すとされている「ちょっと気になる子ども達」である。この分野の医学は日々進化している。その確定診断や基本的な治療は専門医にゆだねるとしても、紹介する時期や診断後のフォローは充分してあげねばならない。我が子を自閉症と診断された母親は悲しみに打ちひしがれ、次第に事実を事実として認め、やがてそれに立ち向かっていくようになる。その課程を十分理解しながら、きめ細かいフォローをしていけるのは我々小児科専門医だけだと思う。また、「ふつうの子ども」であっても、一人前の成人に育てるのには大変な努力と苦勞を伴うものである。そのときのサポーターとして我々小児科医は重要な位置を占めていなければならないと思う。

その基盤の上に立ったとき、はじめて他科の疾患の専門医より、小児科専門医にかかってよかったねと言っていただけではないかと思う。